慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	世界史論講(坂口昂著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.4 (1931. 12) ,p.141(695)- 142(696)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

掌中東西年表（岩井大慧編　四海書房發行）

私の知れる限りに於て、今迄我國に刊行せられた最小輕便なる年表である。縱一〇四ミリ、横七二ミリ、厚さ八ミリ、總紙數二八〇頁、インヂアンペーパーに印刷せられた本書は所謂「ベビー年表」であつて、かなり小さいポケットにも收めることが出來る。私は最近一ヶ月半の支那滿鮮旅行に之を携帶して、少しも邪魔にならなかつた。

本書は卷首の日本年號索引及び支那年號索引により、表中に配列せられた日本、朝鮮、支那、西洋の四段の中、日本及び支那の年號を自由に檢索し、之を朝鮮及び西洋のそれと比較し得るの仕組である。朝鮮と西洋の部に對しては聊か不滿足が感ぜられるけれども、之は本書の使用者にとりてはさして問題とされないであらう。年號索引に於て、朝鮮を支那の部に編入せられたことは、之を凡例に示すよりも、寧ろ支那の下に朝鮮を併記することによつて明示せられた方がよかつたらう。

本書はもともと某氏の個人的便益に供せんがために編せられたものなので、我等の容喙すべき限ではないが、私の平素主張してゐる所の普遍的紀年としての西暦（之については近く刊行さるべき川合教授還暦紀念論文集中の拙稿參照ありたし）中心に今一層留意せられたらば、間接に本邦の修史の發達に利する所が大であつたらうと思はれる。

本書の刊行により、是迄容積上多くの年表に感ぜられてゐた不便が除かれたことは、編者及びその作成依頼者に對し感謝すべきである。（間崎万里）

世界史論講（坂口昂著　岩波書店發行）

故坂口教授遺稿集の第二。昨年刊行せられた『ルネッサンス史概説』に次ぐものである。本書には、卷末所載の「坂口博士著述目錄」中に掲記せられた論文の約半數を收め、之に「進講錄草案」二編が加へられてゐる。本文菊判ベタ組七六四頁。故博士三十年間の努力の結晶である。之に博士生前の二著『概觀世界史潮』と『世界に於ける希臘文明の潮流』を加ふれば、博士の文獻の上に遺された業績の殆んど全部を含むことゝならう。

本書の内容は、一進講錄草案、二古代國家觀、三近世史論叢、四近世史學の成立、五隨想錄の五項に分類輯錄せられてゐるが、その大半は、他の三著と共に、講義若くは講演より生れたものである。以て博士が講演に、文章に長じてゐられたことが分る。隨つて興味ある本書よりして一般讀者の受くる感化は少くないことであらう。

中にも、『近世史學の成立』に收むる諸篇は、青年史學者にとり有益であるが、殊に『古代史研究の發展につきて』の一篇は、教ゆ

る所が最も大である。ランケを中心としたる諸篇に於て、『歴史家ランケなるものは史籍の讀者ランケから生起し』（三九四頁）『彼が「ヴェネチヤ史のコロンブス」たらんとして史料採訪に赴いた』（四〇九頁）ことを說くあたりは、誰も知れる事實乍ら、つい博士の筆力に魅せられるのである。またランプレヒトの史學論爭も今更乍らこの記事によりドイツ史學の盛時を追憶せしむるものがある。尤も博士は『宗教史の研究と史學』の項に、古代東方とキリスト教との關係についての一例として、アッシリヤ學者デイリッチの一九〇二年に於ける御前講演を引用（三五九頁）せられてゐるが、それよりもジョージ・スミスの一八七二年聖書考古學會に發表せる楔形文字の洪水傳說讀破の偉功を擧ぐべきではなかつたらうか。

次に文化史なる言葉は、世間一般には政治史との區別に於て使用せられてゐるけれども、博士は本書に於て、『文化史と言ふ語は近時の流行なるが、吾人の見る所では決して國家又は政治を蔑視すべきでない、國家及政治は文化の中心點である。之を離れては如何なる大努力も決して好文化史を成就せず、Riehl と Freytag は國家を拔きにした文化史を立てたが之は不具である。されば之て、國家を唯一の標準とする G. Schäfer 一派の考も亦偏見である尙ほ又文化の名の下に自然科學的の法則又は形式的階段を設けてこれに一切の史實を投込んで仕舞ふといふ傾向を有するバックルやラムプレヒトの如きも、是亦歴史を逆に考へて之を窮窟にするもので決して文化科學（クルツーアウフツセンシヤフト）たる歴史を取扱ふに當を得たものでない。』（三五一―二頁）

と斷定せられてゐる。舊來のドイツ正統學派の流を汲んだこの史觀は、博士の本書全般に亘る最も公正なる立場であるやうに思はれる。

最後に本書に散見する『抗議派』（二九九頁）『葡爾瓦爾』（二九九頁）『貌利典島』（三〇二、三二一頁）などは、今日の我等には緣遠い言葉で、之は博士三十年の史的生活の中に於て、本邦史學が淘汰し行いた所の足跡を示すものであるが、博士は歴史用語について細心の注意を拂はれてゐた樣で、例へば外國語の Chi と ti とを區別せんと努力せられ、後者に對しては特にチに〇を附したる特別の文字を作成せられたほどである。（中にも『世界史潮』四、九頁等）本邦によく誤用せらるゝ『ルネサンス』といふ言葉について博士は『世界史潮』（七、九頁等のルビ）及び本書（三五四、五三六頁等のルビ及び四〇六、五一六頁等の本文に於てルネーサンスと英語讀とせられ、『希臘文明の潮流』（三〇五、三一三頁のルビ）に於ては、佛語でルネサンスと記され何れも正しく使用されてゐる。然るにその遺稿である『ルネッサンス概說』に於て、書名も內容も共に『ッ』の字を加へて、世間並に誤用せられてゐるのは博士本來の用語法であつたか聊か異樣に思はれる點である。（間崎万里）

西洋美術史研究（澤木四方吉著　岩波書店發行）

西洋美術史學者として光を放つてゐた澤木四方吉氏の遺稿、ルネサンスの部が表題の書の下卷としてこの程出版せられた。

之には嘗つて單行本として世に出た『美術の都』『レオナルド・ダ・ヴィンチ』とその他が含まれ、新に多くの寫眞版が增補せられ